「教養日本力」高度化推進プログラム
オーストラリア・タスマニア大学調査報告

調査者：　留学生日本語教育センター　鈴木智美

訪問先	オーストラリア・タスマニア州　タスマニア大学人文学部 アジア言語・研究学科　日本語・日本研究専攻 Japanese Language & Studies, School of Asian Languages & Studies, Faculty of Arts, University of Tasmania, Australia
訪問目的	1.「教養日本力」高度化推進プログラムについての概要説明 2. 訪問校における日本語・日本関連教育に関する調査（授業見学を含む）
調査日	2008 年 8 月 7 日～8 月 8 日
調査方法	1. 日本語・日本研究専攻の 3 名の先生にインタビュー （Takame Ueki-Sabine 先生、Barbara Hartley 先生、橋本洋二先生） 2. 日本語授業見学 3. 日本語・日本研究専攻の学生 2 名にインタビュー
調査結果	【日本語・日本研究専攻】 ・1972 年開設。（Takame Ueki-Sabine 先生は 1979 年より在籍している。） ・語学力（日本語力）を核として、日本事情、さらにアジア事情に強い人材の養成を目指している。 ・タスマニア大学の人文学部は“double majors”制度をとっている。原則としてどの学生も 1 年次には 4 つの異なる分野の勉強をし､2 年次からはそれを 2ー3 つの分野に絞り込み、最終的には 2 つの分野を専攻する。3 年修了時に、専門分野の 1 つとして日本語・日本研究の major を取得する学生は毎年 25ー30 名ぐらい。 ・例えば日本語・日本研究とは、中国語、アジア研究、経済、ビジネス、法学などの major を組み合わせて取る学生がいる。（人文学部以外の他学部の専攻との組み合わせも可能。） ・設立当初は、伝統的な日本文化への興味から専攻する学生が多かった。1980 年代には日本経済の影響が大きく、「津波」（日本経済からの強い影響と日本語ブーム）が去った後は、今、日本の現代文化（ポップカルチャー）への興味から日本語を専攻する学生が目立つ。 【教員・授業】 ・専任教員 3 名（日本人 2 名、オーストラリア人 1 名）、非常勤教員 10 名

	（日本人６名、オーストラリア人４名） ・日本語科目としては、1年次の学生向けの「Beginners Japanese」（テキスト『ようこそ』）、2年次の学生向けの「Japanese Core Skills」（テキスト『ようこそ』続き）「Japanese in Practice」（ビデオ・小説等使用）、3年次の学生向けの「Japanese Core Skills」（テキスト『ようこそ』の残り他）と「Japanese in Practice」「Reading」「Writing」。さらに上級レベルの科目として「翻訳」「通訳」「ビジネス・ツーリズム」がある。その他に「Overseas Study」として、日本に留学した分の単位認定枠もある。（協定大学への交換留学、または「in-country program」として、日本の提携先日本語学校での5週間の集中コース分が認定可能。） ・日本研究科目としては、「Japan in the 21st Century」「Japanese Film」「Japanese Literature in Film」、また「Research Project」（個人研究としてpaperの執筆）がある。 ・3年間で「日本語」8つが必修。「日本研究」から2つ履修し、平均10科目（最大12科目まで）履修する。（ただし来年次からは「日本研究」からも必修科目を1つ設定する予定） ・“Honours”コース（成績優秀者のみさらに1年、4年次として勉強できるコース）の科目として「応用言語学（日本語）」「日本現代文学」「論文」が設置されている。（対象者は毎年1名ぐらい） ・アジア言語・研究学科では、“Honours”コースの学生には「Theories of Social and Cultural Expression in Asian Contexts」が必修科目。専攻が日本語・中国語・インドネシア語・アジア研究のどれであっても、“アジア”を研究対象とした研究レポートの提出が課されている。（Honoursコースの修了要件は、論文50%、各自の専門分野の科目が25%、この「Theories of Social and Cultural Expression in Asian Contexts」が25%である。タスマニア大学のUeki-Sabine先生より、「このことからもわかるように、タスマニア大学のアジア言語・研究学科では、各自の専門分野の土壌である『アジア』全般を、複眼的にとらえられる力を備えた卒業生の育成を目指している」とのコメントあり。） ・contact hoursが限られている中で、コースとしてどれだけ日本語のレベルを上げることができるかが常に課題となる。（できれば、日本語初級レベルは2年次までで終わらせたいのだが、時間数の制約あり。） ・高校（タスマニアの教育制度で言う“college”の12年生レベル）で一定レベルの日本語を勉強済みの者は、大学入学後、大学2年次のレベルの日本語科目から履修可能。（今年より、大学1年次レベルの日本語科目については、所定の課題をクリアすることで履修済みとして認定されることになった。いわば高校から単位を“先取り”できるシステム。高校

	における外国語教育の地位の向上と、大学とコミュニティとの結びつきの強化、さらに入学者数の確保も目的。） 【教育】 ・大学全体で約 40 ある学科（schools）の中で、アジア言語・研究学科は、その教育について、6 年間で 4 回、学生から 1 位の評価を得ている。（非常に名誉なこと。）特に日本語・日本研究専攻の教員は、teaching に関して大学内外の栄誉ある賞を多く受賞している。職員も教師の経験のあるスタッフがそろっており、行き届いた対応が可能となっていることも大きい。 ・大学内に CALT（Center for the Advancement of Learning and Teaching）という部署があり、学生への学習支援だけでなく、教員の PD（professional development）についても担当している。教員も教育スキルを磨くため、このセンター主催のセミナーに参加したり、専攻単位のスタッフミーティングに講師を派遣してもらうことができる。 【交流】 ・名古屋外国語大学、三重大学ほか 5 つの協定先大学に交換留学が可能。（毎年 7ー8 名） ・協定校以外とも、Polycom による遠隔授業を一部取り入れ、日本の大学との共同教育を実施している。 ・協定校で日本語あるいは英語、国際コミュニケーション等を専攻する学生を募集し、日本語アシスタント（Japanese Exchange Teachers）として州内の小学校ー高校に招聘・派遣するプログラムを実施している。（参加者による自費参加、毎年州内の 10 数校に派遣。過去 10 年で州内の 50 校以上に派遣している。） ・この日本語アシスタント教員の他、大学などに留学している日本人学生をネットワーク化し、日本語・日本研究専攻のオーストラリア人学生と「Language Exchange Partner」としてマッチングするプロジェクトを続けている。（パートナーと互いに言語学習を助け合う） ・アジア言語・研究学科の学生と、タスマニア大学の集中英語コース（夏期・冬期約 4 週間）に短期で学びに来る日本人大学生とが、メール交換から始まり、現地で実際に交流を深めていくプログラム「EMS」（Email Mate Scheme）も実施。 【日本語・日本研究専攻の学生インタビュー①】 ・1 年次に選んだ 4 分野は「心理学」「プログラミング」「日本語」「哲学」。

	2年次から「心理学」と「日本語」を専攻することにした。 ・高校の時、日本の戦国時代のゲームをして、非常におもしろく、興味を引かれた。大学に入ってから日本語を学び始めた。 ・日本文化も面白いが、日本語の勉強の中では文法が一番おもしろい。言語（学習）の“core”だと思うから。漢字は連想法を自分で工夫して覚えていった。初級の最初は、ひらがな・カタカナ、新出の語彙と、短い期間に覚えなければならないものが多く大変だった。 ・大学を出たら、英語のアシスタント教員として2年ぐらい日本で教えたい。日本文化を自分の目で見たい。 ・教室以外で、補足的に自分で勉強できるmaterialがもっとあればいいと思う。(→例として本学開発のe-learning教材「jplang」を紹介) 【日本語・日本研究専攻の学生インタビュー②】 ・1年次で、「日本語」「中国語」「アジア研究（歴史・社会・文化)」「哲学」を勉強。2年次から「日本語」と「中国語」専攻。 ・高校でも日本語を勉強していた。両親が英語とドイツ語のバイリンガルで、言語の学習に興味があった。姉が日本語を勉強しているのを見て自分もやりたいと思った。 ・Samuraiや忍者にも興味があるし(オーストラリアの男子学生の多くが興味を持っているのではないか)、現代の日本の企業文化や日本人の生活にも興味がある。 ・1年間協定校に留学。留学当初は、これまで習った日本語のレベルで十分コミュニケーションができるわけはなく、非常に難しかった。音楽（チェロ）をやっていたので、部活動（室内楽団・合唱団）に入ることで、日本人学生と共有するものができ、コミュニケーションもできるようになっていった。日本語の授業も受けたが、それ自体がそんなに良かったとは思わない。自分は、教材などには頼らずに、友だちと話したりすることで上達していくタイプだと思う。 ・留学して、自分で自分のことがわかるようになったのが一番の収穫。もっとこうしたい、もっとこうできればいいのに、ということが自覚できるようになった。 ・留学時代の日本の友人たちとは、MIXI（ミクシィ）（ネット上のソーシャルネットワーキングシステム）を使って毎日やりとりしている。 ・今はアルバイトで中高生に日本語を教えている。卒業後は、英語のアシスタントとして、1年ぐらいは日本に行きたい。その後、できれば言語と関わりのある仕事をしたい。

（報告作成日：2008年9月1日）

日本語「Beginners Japanese」のクラス

ビジネスを専攻する学生（アジアからの留学生が多い）の他、
日本語のみパートタイムで学びに来ている一般成人の学習者もいる。

タスマニア州の州都ホバート